

お世話になりました。

飯間 理史



京都大学ヘリオトロン核融合研究センターの就職面接を受けた時の面接官がヘリオトロンの生みの親の宇尾先生と核融合科学研究所初代所長の飯吉先生でした。ヘリオトロンでは電子サイクロトロン共鳴加熱を担当していましたが、最初に使った発振管がジャイロトロンで、当時アメリカにおられた小森先生がバリアン社と開発した発振管であることを後で知りました。

核融合研には平成6年に異動してきました。それから24年、技術部、研究部はもちろんのこと管理部の協力もあり、平成29年には重水素実験が開始され、イオン温度1億2,000万度が達成されました。

苦勞して買っていただいたNC工作機で最高出力を伝送する導波管をつくることができました。共同研究システム開始時のデータ入力は大変でした。外国語での見学者案内も苦勞の連続でした。これらは管理部の方々の多大な協力が無くては遂行できませんでした。

海外出張もいい経験でした。アメリカのGA (General Atomics) では、核融合研に比べて多くの人たちがNBIの技術者として働いてい

ました。この出張では竹入先生に多喜田さんと同行しましたが、帰りの橋の料金所の前を車で走行中、目の前で2台の車が並走しながら何度もぶつかる事故に遭遇しました。幸い我々の車には影響なかったのですが、ひきつった竹入先生の横顔を今でも覚えています。

支えていただいた技術部、運転員の皆さんに感謝します。素晴らしい人たちに支えられ、最高の技術者人生を送ることができました。

心から感謝するとともにヘリカル未来もよろしく願います。

(技術部長)

退職にあたって

谷口 能之



もう退職、やっとな退職、どっちが本当の心境かわかりません。長かったのか、短かったのか・・・技術職員としてちゃんとやって来れたのか、というのが正直なところかも知れません。

1976年に名古屋大学プラズマ研究所に採用時は準定常共通電源で運転、監視、保守に、後のJIPP T-IIでは、運転・保守、真空、計測、加熱、データ処理、プラズマ調整などと小型装置ならで、何でもやってきました。関連装置の設計から製作と何でも経験でき、いろいろ身に付けることができた時期でもありました。LHDでは中央制御を担当することになり仕様の検討から、構築という建設に関わる重要な仕事ができ、なかなかできない経験をさせていただきました。技術部定員増計画の概算要求では、特に要求資料も当時は当たり前の文章表現などより目に訴えようと初期型のマック上でマウスによるお絵描きをして資料を作成し、3課10係から今の5課20系の体制を築くことに貢献できました。

副部長を兼務することになってここ数年は技術部の対外的な業務を行って、自然科学研究機構内は元より全国の技術職員との交流を深め

ることができました。最近では、次世代の技術部を担う職員採用のために計画から採用活動まで尽力してきました。また地域活動として今年退職された山内さんの下、幼稚園、児童館、イベントなどで理科工作室の一員として活動するようになり、今では地域のお祭りなどに行くと、子供さんや親御さんからもご挨拶していただけるようになりました。

私にとってはあれもこれもと技術面だけでなくいろいろ経験させていただいた42年間であります。退職にあたりこれまで多くの方々にお世話になりましたこと、この誌面をお借りしましてお礼申し上げます。ありがとうございました。

(技術部副部長・制御技術課長)